

ワークショップを終えて

「京都大学・南京大学社会学・人類学ワークショップ」は、日中の若手研究者の学術交流を目的として2011年度より継続して行っており、今年で三回目を迎えることができた。前二回までは南京大学で行ったが、今年度は京都大学のアジア研究教育ユニットの支援を得て、中国側発表者を招聘するという形で、京都大学でワークショップを開催することができた。

今回のワークショップは「国際連携大学との協働により大学院生の教育と研究指導を行う」というアジア研究教育ユニットの意向に沿って、企画と運営を学生主体で行った。

本ワークショップの特色として、マルチリンガルを掲げ、英文原稿を必須とせず、事前に発表者全員分の日本語原稿と中文（英文）原稿を用意したのも、日々アジアの学生と交流しながら研究を進める身として、互いにとっての外国語である英語を用いた交流より、できることなら互いの母国語での交流が望ましいと感じるからである。このことに対して落合教授からは、「アジアにおけるマルチリンガルの研究集会の実現に向けての有意義な試みであった」とのお言葉を賜ったが、このような実験的な試みが許されたのも、「ワークショップの運営は学生に委ねる」というユニットの柔軟な方針があったればこそ、と深く感謝している。この「ワークショップを終えて」では、各報告の補足を兼ねて質疑応答の内容について略述したい。

まず、福谷の発表「想像の共同体としての中華帝国—儒教思想の展開の観点から」では、儒教の伝統的世界観である「天下的世界観」には、近代のナショナリズムを超克する論理があることを指摘した。これに対して福田宏先生からは、「天下的世界観からナショナリズムへの転換は、その変化を強調し過ぎではないか。ナショナリズムというものの柔軟性・汎用性を踏まえて両者の連続性を考察することもできるのではないか。」との指摘を受けた。

次に中山大將氏「残留日本人とは誰か—北東アジアにおける境界と家族」に対しては、残留者に対する日本政府の認識と、残留者の次世代におけるアイデンティティについて質問が提出された。これに対して、中山氏より、「日本政府の立場としては、残留日本人は飽くまで日本人であり、日露間の中間的、両属的存在としては受け入れない。ただし、日ロ友好のシンボルとしては利用されうる。また世代間の文化問題は大きく、孫は日本語を知らないことも多く、日本へのアイデンティティは希薄になっている。」と答えた。

柴向南氏の「政治資本分布不均衡の中国農村における階層分化の影響—安徽省宅坦村のフィールド調査に基づいて」には、研究対象であるZ村の地理や人口や中流階層の厚さに対する説明や、「政治的上層」の語の説明が求められたが、これに対して「上層下層の格差は大きく中流階層は発達していない」、また「政治的上層の指標は党员や党の幹部であるかどうかだ。」と返答があった。

呉天躍氏の「温州龍船と地方社会変遷の民族研究」に対しては、「龍船を通じての同族集団としての宗族意識の復興はあるのか」という質問があったが、「宗族における高い世代の人達はスポーツ龍船を若い人のものと見ており、宗族全体としてスポーツ龍船を担っていこうという意識が共有されているわけではない。むしろ実態は宗族関係を通じてのス

ポークラブの形成に近いのではないか。」と答えた。

方莉琳氏の「毛沢東時代における労働者の婚姻」に対しては、「労働力流入による男女比の不均衡の程度はどの程度か。」という質問があり、「男性が工人の八割に昇る。女性には工場労働者への憧れがあり、妻は夜勤に回されることもあった。」という返答があった。

松谷実のりの「個人的移民の移住先選択要因—上海と南京の比較から」に対しては、上海との比較対象として南京を選んだ理由に対して質問があった。これに対して松谷氏からは「経済が発展して移民が多く集まる上海と、南京のような経済的發展がほどほどで、移民の数もさほど多くない南京の状況を調べることで、海外に移住する日本人の拡散状況と、どういったタイプの日本人がどういう場所で増加しつつあるのか、ということを知ることができる」との返答があった。

櫻田涼子氏の「他民族国家マレーシアにおける華人的公共領域の誕生—孟蘭勝会の慈善活動の事例から」に関しては、櫻田氏は、「参加者の減少に対してはどのような取り組みがなされているのか」という質問に対して「くじびきによって責任者を決めている。」と、また、「孤鬼祭と外部社会との間にはどのような関わりがあるのか」という質問に対しては、「地域の有力者を祭に招待をして、その場で地域問題を訴えるなど、政治的関わりも存在する。」と答えた。

聶偉氏の「社会経済的地位と環境リスク配分の差異—厦門の廃棄物処理に関する実証的研究に基づいて」に対しては、瀬戸徐映里奈氏から「都市と農村のグラデーションや収入と学歴の関係などが構造的に組み込まれてしまっているのではないか。」という指摘があったが、これに対しては「今後の研究的で構造的問題を見たいが、アモイは農村と都市の格差が大きいので、中国における代表的ケースとして扱えるかはわからない。」と返答した。以上は質疑応答の概要である。

最後に私事となるが、二回目の南京での発表に引き続き、今回の京都でも発表の機会を得ることができた。前二回は南京で行われ、今回は京都で行うことができたが、このことは京都大学・南京大学がこれから継続的な交流関係を築いていく上で、多少ながら貢献ができたものとする。関係各位の皆様方に心より感謝の言葉を申し上げます。

2013年12月11日

福谷 彬

## 结语

“京都大学南京大学社会学人类学论坛”是以中日年轻学者的学术交流为目的的一个论坛。自 2011 年起已持续进行了两届，今年是第三个年头。前两届都是在南京大学举行，而今年我们得到京都大学亚洲研究教育机构的资助，以邀请中方发言人的形式，在京都大学召开了论坛。

关于本论坛的特色等，序文中有详细说明，在此不多赘述。我们想借此机会，最后对论坛当天的提问及回答部分进行一个小结，以期更为全面地了解此次论坛报告论文的内容，也更能体现论坛进行的价值。

首先是福谷彬的《作为“想像的共同体”的中华帝国——从儒教思想展开的观点出发》这篇报告。福谷认为儒教传统世界观的“天下世界观”中蕴含着超越近代国家主义的思想，并对此进行了详细说明。对于这一点，点评人的福田宏老师认为，福谷过于强调“天下世界观”与“国家主义”的思想转变，基于“国家主义”这一概念的柔韧性与广泛性，两者之间的关联同样值得考察。

其次是中山大将的《残留日本人是谁：东北亚的边境与家庭》这篇报告。关于这篇报告，有人提出了以下两个问题，第一，日本政府对残留者的认识。第二，残留日本人的下一代的个人归属问题。对此，中山的回答到：“日本政府认为残留日本人依旧是日本人，不能将他们认为是日俄的中间型或双重所属，但作为日俄友好的象征时可以利用。其次，代际间的文化差异越来越大，残留日本人的孙子辈大多不会日语，对日本的归属意识也日渐淡薄。”

对柴向南的《在政治资本分布不均衡的中国农村阶层分化的影响——基于安徽省 Z 村的田野调查》报告，点评人阿部友香对研究对象 Z 村的地理、人口、中间阶层的存在人数以及“政治上层”的意义进行了提问。对此，柴同学认为“上下层间的差距不断增加，中间阶层并不发达，而政治上层定义的指标多是党员以及党干部等。”

吴天跃在论坛上就他的硕士论文《温州龙舟及地方变迁的民族研究》进行了报告。对此，点评人的今中崇文提出：“同族集团的宗族意识有没有因为龙舟而得到复兴？”对此吴天跃同学回答到：“在宗族中，辈分高的人认为体育龙舟是年轻人的东西，因此体育龙舟并不拥有承担宗族命运的意识。但事实上很多体育龙舟的娱乐部多是通过宗族的关系形成的。”

关于方丽琳的《毛泽东时代的劳动者婚姻》，点评人猪股祐介就“劳动力流入的男女比例的不均衡达到了什么程度”进行了提问。对此方丽琳同学解释到：“男性达到了工人总数的 80%，女性因为对工场劳动者有向往之情，妻子值夜班的情况也有。”

松谷实的发言题目为《个体移民的移居地选择原因：上海与南京的比较研究》。点评人猪股祐介就为何要将南京作为上海的参照对象进行比较提出了问题。对此，松谷回答到：“对经济发展程度高移民众多聚集的上海，以及经济发展处于中流水平，并且移民总数也不多的南京进行调查，可以了解海外移居日本人的分布状况以及具体的哪些阶层的日本人在哪些地区不断增多等等。”

在樱田凉子的《多民族国家马来西亚的华人公共领域的诞生——从盂兰盆节的慈善活动来看》报告之后，有人提出了“对于参加者的不断减少，当地华人采取了哪些措施？”以及“孤鬼祭与外部社会之间有何种关联？”两个问题。对此，樱田的回答是：“他们通过抽签的形式来确定负责人。另外，当地的华人团体通过邀请有权有势者参加祭祀，在祭祀活动中向权势者倾诉当地的问题，因此存在政治性的关联。”

聂伟发言的内容为《谁承担更多的风险？：社会经济地位差异与环境风险分配》。对此点评人濑户徐映里奈提出了以下问题：“城市和农村的阶层、收入与学历的关系是否结构性地进行归纳？”对此聂伟的回答到：“希望在今后的研究中能够对结构性的问题进行思考，在厦门农村与城市的差距很大，是否可以作为中国的代表性案例还值得商讨。”

以上为本次论坛的提问答疑部分的内容。最后借此结汇向帮助本论坛运行的各位老师以及同学再次表示衷心的感谢。

2013年12月  
福谷彬